学校給食だより　秋田っ子給食　NO－97

公益財団法人　秋田県学校給食会

文科省学校給食の「会話可」通知「すぐには元に戻れない」

教育関係者　コロナ収束見通せず苦悩

前を向いて静かに給食を食べる児童＝13日、秋田市の明徳小

文部科学省は11月末、学校給食で適切な対策を取れば「会話は可能」とする通知を出した。新型コロナウィルスの感染対策として多くの学校で続けられてきた「黙食」。新型コロナの収束が見通せない中、「すぐ元の形に戻すのは難しい」という教育関係者の声もある。子どもたちは今、どのように給食の時間を過ごしているのだろうか。

「手洗いは終わった？」「ちょっと換気しようか」。13日昼、秋田市の明徳小学校（加賀一幸校長）の学年ホールでは、給食の準備に取りかかっていた。5年担任の濱松真美教諭(57)が、みそ汁をよそいながら児童に小まめに声をかける。

ご飯やおかずを受け取った児童は、授業と同様に前を向いたまま着席。控えめな声で「いただきます」をした後、マスクを外して食べ始めた。食事が終わるとすぐにマスクを着けた。

給食は児童生徒の健やかな成長や健康を支える役割がある一方、感染リスクが高いという側面もある。明徳小では新型コロナの感染が拡大した2020年以降、最低限の会話、換気、机の間隔を空けるなどの対策を徹底。密を避けるため、配膳を順番制にしたり、少しの会話も禁止したりしたこともあったという。

5年の小松美咲さん（10）は「前はグループでいろいろな子とおしゃべりしながら食べられたのに」と残念そう。濱松教諭は「子どもたちにとって食べることは本来楽しいことのはず。給食が楽しくない時間にならないよう、感染状況に応じた対応に気を配っている」と話す。

政府は11月、新型コロナ対策の基本的対処方針から「黙食」の記述を削除。文科省はこれまで学校向けのマニュアルで給食中は飛沫が飛ばないように机を向かい合わせにしないことや、大声での会話を控えることなどを求めていたが、政府の対応を受け、給食中の黙食は求めないことを初めて明文化した。

県教育庁は、この通知を各市町村教育委員会や県立学校へ送付。県独自の方針などは示さず、具体的な対応はそれぞれの判断に委ねている。秋田市教育委員会の担当者は、新型コロナによる小中学校の学級閉鎖、学年閉鎖が相次いでいる状況を踏まえ、「以前のような給食にすぐ戻すというのは現実的に難しいところがある。学校では目の前の安全対策を第一に考えている」と苦しい胸の内を明かす。

一方で、黙食の緩和を求める声も。小学1，4年の児童を持つ秋田市の女性(45)は「子どもの通う学校は、給食の時間に少しでも話すと先生から注意される状況が続いている。大人の会食は認められているのに、子どもだけ我慢を強いられる状況は疑問だ」と指摘する。

食育に詳しい秋田大学教育文科学部の瀬尾知子准教授(53)＝発達心理学・保育学＝は「集団での食事は、他者のことを知り、自分のことを伝えるなど、リラックスした状態のコミュニケーションを通じて社会性を育む側面がある」と給食の大切さを協調する。感染状況を見ながら、表情や身ぶり手ぶりといった言葉を介さないコミュニケーションを取り入れたり、小声での会話を認めた上で徐々に机の間隔を狭めたりといった対応法を挙げる。「子どもにとって給食が楽しければ、学校生活もより楽しいものになる。ぜひ、工夫しながらより良い時間にしてほしい」と述べた。（川村巴）（秋田魁新聞　令和4年12月18日(日)より一部抜粋）